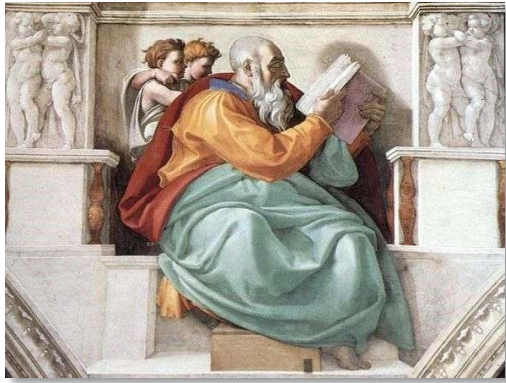


阿佐ヶ谷教会



システィナ礼拝堂のゼカリヤ（ミケランジェロ）



信友会 会報

聖書研究 ゼカリヤ書

11月例会・役員会（2019年11月24日）報告

12月役員会（2019年12月15日）報告

阿佐ヶ谷教会ではクリスマスの諸行事も終わり、歳の瀬を迎えましたが、皆様この一年はいかがお過ごしだったでしょうか。信友会は今回のゼカリヤ書と1月に予定しているイザヤ書で一連の預言書シリーズの聖書研究も一段落します。正義と堕落、王国の滅亡という政治的状況、文化や風土も含めた時代背景、またゼカリヤ書にも出てくるいくつかの「幻」。理解するのが大変だったのですが、充実した時間を持つことができました。2020年はオリンピックイヤーで賑やかになると思いますが、信友会ではそういった中で毎月1回聖書の学びを通して、新たな知恵と知識を授かりたいと願っています。（Y.O）

預言者ゼカリヤ

古屋治雄牧師

今回は、昨年からの預言者シリーズの継続として「預言者ゼカリヤ」を取り上げます。

ゼカリヤの活躍した時代は、イスラエルの民がバビロンから帰還して、民としての共同体の再建、バビロニアにより破壊された神殿の再建を始めた時期です。ペルシャ王国のキュロス王がバビロニアを征服し、捕囚されていたイスラエルの民を開放しました。人々が帰還したイスラエルでは、すでに他の民族が住んでおり、民族としての共同体の構築や礼拝体制の確立が困難でありましたが、イスラエル民族の統一には礼拝体制と律法の確立が大切であり、そのためには神殿の再建が果たさなければならない大事業となっていました。

預言者ゼカリヤの時代と出自

預言者ゼカリヤの出自は、他の預言書と同様にはっきりした明示はありません。ゼカリヤ書1章の1節から、ダレイオスの第二年8月に、イドの孫でベレクヤの子である預言者ゼカリヤとあります。祖父のイドについては、ネヘミヤ書12章4節にバビロンから帰還した祭司とレビ人として「イド」の名があり、16節にヨヤキムの時代に祭司であった者として「イド家のゼカリヤ」の名があります。これによりゼカリヤの活躍した時代はイスラエルの民のバビロンから帰還後の紀元前520年頃となります。ゼカリヤは祭司であると言ってよいでしょう。預言者ゼカリヤの預言は、エゼキエルと同様に「幻」により行われたのが特徴です。

エルサレムの第2神殿の再建についてはエズラ書に詳細に書かれており、1章からのキュロス王の布告にある





捕囚民の帰国とイスラエルの神殿の再建許可、バビロン捕囚時にネブカドネツアル王が持ち去った神殿などの金銀財宝を返還する命令が出されました。エズラ書5章1節からは、預言者ハガイとゼカリヤがイスラエルの神の名のもとに神殿を建設せよと預言しています。建設中の神殿再建の工事は先王の干渉で一旦中断されたが、6章1節からダレイオス王にキュロス王の神殿建設の許可の真偽を確認する依頼が出され、調査の結果キュロス王の布告が見つかり、ダレイオス王が神殿の再建などの許可を出しました。

ゼカリヤ書の冒頭に戻り、3節から「わたしに立ち帰れ、そうすれば、わたしはあなたのもとに立ち帰ると、主は言われる」。あなたたちの先祖のようであってはならない。先の時代の預言者達が「悪の道と悪い行いを離れて立ち帰れ」と呼び掛けても彼らは聞き従わなかった。そのため先祖は罰せられ、バビロンへの捕囚と国土の破壊が行われたと言います。

ゼカリヤの預言した幻

ゼカリヤに臨んだ第1の幻は、1章7節から、ミルトスの林の中で4頭の馬を従えた赤毛の馬に乗った主の御使いを見たので、わたしが「わが主よ、これは何ですか」と問うと主の御使いが答えて、地上を巡回させるために主が遣わした者だと言います。11節で彼らは主の御使いに「地上を巡回し、地上の人々はすべて安らかに暮らしています」と答えます。しかし、主の御使いは、「万軍の主よ、いつまでエルサレムとユダの町々を憐れんでくださらないのですか。あなたの怒りは70年も続いています」。主は、御使いに優しい言葉、慰めの言葉をもって答えられた。そして御使いはわたしに「呼びかけて言え、万軍の主はこう言われる。わたしはエルサレムとシオンに激しい情熱を傾け、安穩にしている諸国の民に対して激しく怒る」。16節に「わたしは憐れみをもってエルサレムに帰りわが家をそこに建て直させる。」17節には、「わたしの町々は再び恵みに溢れ 主はシオンを再び慰めエルサレムを再び選ばれる」。イスラエルの再建については多くの問題があり共同体の再建などに困難がある中、主はエルサレムを決して見捨てないと言って下さるのです。

第2の幻は、2章にあり、主がわたしに4本の角を示し、それはユダ、イスラエル、エルサレムを蹂躪した角であると言います。更に主は4人の鉄工を示します。彼らは何のために来たかを尋ねると、「ユダに角を振るって震え上がらせた国々の角を切り倒すために来た」と言います。暴虐を誇った国もまた神の力により裁かれると言うのです。巨大王国は栄枯盛衰を繰り返し、ペルシャ、マケドニア、ローマへと変遷しました。

第三の幻は、2章5節から、測り縄を持った人が現れます。そしてエルサレムを測り、幅と長さを調べるためだと言います。別の御使いからは、「あの若者たちに告げよ。エルサレムは人と家畜に溢れ城壁のない開かれたところになる。私自身が町を囲む火の城壁となる」と言われます。2章14節には、「娘シオンよ、声をあげて喜べ。わたしは来てあなたのただ中に住もう。16節には「主は聖なる地の領地としてユダを譲り受けエルサレムを再び

選ばれる」。シオンの復興の宣言を帰還の民はどのように聞いたでしょうか。これにより人心を纏められたでしょうか。民の負わされている課題は多く、簡単ではないと思われます。

また、ゼカリヤ書と同時代の預言書ハガイ書1章2節では、「この民はまだ神殿を再建するときは来ていない」。4節では「この神殿を廃墟のままにしておきながら自分たちは板をはった家に住んでいてよいのか」。9節に「多い収穫を期待したがわずかであり、しかも、お前たちが家に持ち帰るとき、私はそれを吹き飛ばした。…わたしの神殿が廃墟のままなのにお前たちはそれぞれ自分の家のために走り回ったからだ」。神殿の建設を止めたまま私利私欲に走っていると言うのです。

大祭司ヨシュアとゼルバベル

3章は、第四の幻で、ここでは大祭司ヨシュアの祝福です。御使いはヨシュアの汚れた衣を脱がせ、「わたしはお前の罪を取り去った。」そして、晴着を着させて、清いかぶりものをかぶせます。そして「万軍の主はこう言われる。もしあなたがわたしの道を歩み、わたしの務めを守るなら、あなたはわたしの家を治め、わたしの庭を守るものとなる。」と祝福しています。

4章は、第五の幻、ゼルバベルの信任です。ゼカリヤの夢にある、頭部に7つのともし火皿を持った燭台について、6節に「これはゼルバベルに向けられた主の言葉である。武力によらず、権力によらず、ただわが霊によって、と万軍の主は言われる」。9節「ゼルバベルの手がこの家の基を据えた。彼自身の手がそれを完成するであろう。」ゼルバベルは、ペルシャの優秀な指導者としてイスラエルに派遣された者で、大祭司ヨシュアと共にエルサレム神殿再建を指導することになるのです。

5章1節から、第六の幻は、巻物が出てきて全土を飛び回り、片面に書かれた呪いによって、盗人や偽って誓う者を滅ぼすと言います。5節からは第七の幻として、エファ升が出てきます。エファ升の中には邪悪の象徴である女性があり、シニアルの地に運び神殿を建て、邪悪な企みをすると言います。6章1節から第八の幻が示されます。4頭の戦車が、主の御前から四方に行き巡り、そして地上に神の支配を敷衍させると言います。

6章9節からは、バビロンから帰還した大祭司ヨシュアに戴冠して、12節「見よ、これが『若枝』という名の人である。その足元から若枝が萌え出でる。彼が主の神殿を建て直す。」イスラエルの指導者に大祭司ヨシュアとゼルバベルを任じて神殿の再建を実行させます。



断食と回復の約束

7章及び8章は、断食と回復の約束です。主から、イスラエルの民や祭司は5月、7月に断食をして嘆き悲しんできて70年になるが真に私のために断食してきたかを問われます。9節「主は正義と真理に基づいて裁き、互いにいたわり合い、憐れみ深くあり、やもめ、みなしご、寄留者や貧しいものを虐げず、互いに災いを心に企んではならない」と言ったが、彼らは耳を傾けず、かたくなに背を向けたので、14節「彼らを知らない国に散らし、喜びの地を廃墟に帰させた」と言います。

8章からは、帰国した民に向かい、2節、「わたしはシオンに激しい熱情を注ぐ。激しい憤りをもって熱情を注ぐ。わたしは再びシオンに来て エルサレムの真ん中に住もう。エルサレムは信頼に値する都と呼ばれ 万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。」エルサレムの町は人に溢れ、繁栄が戻ると言っています。そして民に向かって互

いに真実を語り合え。城門では真実と正義に基づき 平和をもたらす裁きをせよと言います。第 2 神殿の再建による礼拝の統一と律法の確立がイスラエル民族の統一をもたらすものなのです。

ゼカリヤ書の全体は 14 章で構成されますが、預言者ゼカリヤの預言は 8 章までで、9 章以降は後に預言書を編纂した人々が付け加えた内容であると解釈されています。9 章、10 章は、諸国民の裁きとイスラエルの救いで、周辺の国々にも神の支配があり、イスラエル民族は神との契約の故に苦難から助け出すと言います。9 章 9 節には「娘シオンよ、大いに踊れ、娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者 高ぶることなく、ろばに乗ってくる」。この聖句は、マタイ福音書 21 章 5 節のイエスさまのロバに乗ったエルサレム入場に引用されています。

(文責：玉澤武之)